魅力的な道徳の授業を進める指導の工夫

－生徒の心に響く道徳の時間を目指して－

大和郡山市立郡山東中学校　教諭　渋　谷　美　奈
Shibutani Mina

要　　　旨

生徒の心に響く道徳の時間とは、生徒が道徳的価値の自覚を深める時間である。その充実のためには、話合い活動はとても大切である。生徒は、友達の考え方を理解し自分の考え方を明確にすることによって、道徳的価値の自覚を深めていくからである。そこで、生徒の多様な意見を引き出す工夫、また、その意見を整理することの大切さについて、実践を通して考えた。

キーワード：　道徳の時間、道徳的価値の自覚、話合い活動、発問の工夫、板書の工夫

1　はじめに

これまで私が目指してきた「生徒の心に響く道徳の時間」とは、「生徒が活発に意見を言い合える時間」であった。そして、その実現のために、マンガの台詞や歌詞の一部を生徒に考えさせる、ビデオや新聞記事を利用する、役割演技を取り入れる、アンケート結果を利用するといった工夫をしてきた。また、座席の配置も、班ごとにしたり、円形やコの字形にしたりしてきた。

これらの実践を振り返ると、確かに生徒は活発に意見を言い合っていたが、「道徳的価値の自覚を深める」までには至っていなかったように思う。というのも、教員である私自身が、意見が活発に出ることで道徳の時間が充実していると思い込んでいたからである。そこで、道徳的価値の自覚を深める道徳の時間の在り方や工夫について、実践を通して考えることにした。

2　研究目的

生徒が道徳的価値の自覚を深める道徳の時間の在り方や工夫について考察する。

3　研究方法と内容

道徳の時間の目的は、「道徳的価値の自覚を深める」ことである。「道徳的価値の自覚を深める」とは、『中学校学習指導要領解説　道徳編』（以下、解説書という）によれば、「道徳的価値について理解する」「自分とのかかわりで道徳的価値をとらえる」「道徳的価値を自分なりに発展させていこうとする」ことである。これまでの自分の実践を振り返ると、生徒は活発に意見を言い合い、授業時間が終わりになると「もっと続けようよ」「時間が足りない」という声が出るなど、いろいろな意見を出し合える学級の雰囲気があったと思う。

しかし、「活発に意見を言い合う」と「しっかり考える」とは違い、単に楽しい「意見発表会」という授業でしかなかったような気がする。生徒一人一人が、人間としての在り方や生き方という視点で、資料の登場人物や友達の考えを理解し、自分自身を見つめ、将来へと発展させていこうとするところまでは、できていなかったように思う。解説書にも、「『話合い』は話すことと聞くことが並行して行われ、生徒が友達の考え方についての理解を深めたり、自分の考え方を明確にしたりすることができるので、主体的に道徳的実践力を身に付ける上では効果的な方法である」と示されている。しかし、果たして私の授業の中

で、道徳的実践力が身に付いていただろうかと考えると、あまり身に付いてはいなかったような気がする。そこで、道徳的価値の自覚を深めるために、次のような点を課題として研究を進めることにした。

○　話合い活動の中で、生徒が自己理解や他者理解を通じて、道徳的価値を自分自身とのかかわりの中で考え、自覚すること。 ○　教員自身が、生徒と共に学ぶ姿勢で道徳の授業に臨むこと。

(1)　話合い活動の中で、生徒が自己理解や他者理解を通じて、道徳的価値を自分自身とのかかわりの中で考え、自覚すること。

生徒は、資料中の登場人物の考えや他の生徒の発言から、道徳的価値を理解する。例えば、「主人公はどのような行動をするだろう？」という問いに対して、同じような行動を挙げたとしても、その行動を起こす動機や理由は様々である。そこで教員が「なぜ」「どうして」と問いかけることで、生徒は自分自身を振り返り、自分の意見について深く考える。そのときの見方や考え方は、これまでの体験や経験を通してはぐくまれたものである。そして、他の生徒の考え方を知ることによって、自分にはなかった様々な考え方にふれることができる。他の生徒の考え方と自分の考え方とを比べることによって、自分なりに自分の見方や考え方を見直し、これからの生き方について考えていくのである。

つまり、他者理解と自己理解の繰り返しによって、様々な角度から物事を見つめ、自分の考えを広めたり深めたりすることができるのである。

(2)　教員自身が、生徒と共に学ぶ姿勢で道徳の授業に臨むこと。

中学生の時期は、保護者や教員等の大人に批判的な態度をとったり、社会や学校の様々なきまりに反発したりすることもある。頭の中では分かっていても感情や衝動のおもむくままに行動してしまい、後で自己嫌悪で悩むこともある。また、友人関係などでの悩みも多い時期である。しかし、夢や理想をもち、その実現に向けてこつこつ努力をしたり、生き方について深く考えたりするようになる時期でもある。そういう心の揺れを、私たちは広く大きな心で受け止め見守ることが大切である。道徳的に完成された人格者という姿勢で生徒に接するのではなく、生徒と共に考え、悩み、感動を共有していくという姿勢をもっていれば、生徒も心を開き積極的に学習に取り組むようになる。教員と生徒の人間関係を深めることが大切である。特に道徳の時間は、生徒が自分の心と向き合う時間であるからなおさらである。

4　研究結果と考察

以上のことを、実際の道徳の時間の中で、どう具体的に工夫できるのかを考えることにした。

主題名	集団生活の向上　４－（１）
資料名	明かりの下の燭台（『自分を考える』あかつき）
ねらい	一人一人が集団の中の自分の役割や責任を果たすことは、個人としての「充実感・達成感」、更には集団としての「充実感・達成感」を高め、集団生活を向上させることに気付き、自ら集団の一員としての役割や責任を果たそうとする意欲をもつ。

(1)　資料選びの工夫

文部科学省の柴原弘志調査官は、資料のことを「心の中を映し出す内視鏡」「心を磨く砥石」と例えておられる。一方、私自身、これまでは、副読本の内容項目に従っていくつかの資料を検索し、概ね自分の直感で資料を選択し、最後は、指導書を参考に中心発問を考えていた。「心を磨く砥石」といったとらえ方とは、随分、開きを感じる。

しかし、何回も資料を読み、授業の展開を考えていくうちに、その資料に引き込まれていく自分がい

た。よい資料とは、まず、教員自身の心に響くことが大切であるとよく言われるが、そのとおりであった。解説書には、生徒が学習に意欲的に取り組み、充実感をもち、道徳的価値の内面的な自覚を深めることができるようにするために、次の五つの要件をもつ資料を選ぶように心がけることと示されている。

ア　生徒の感性に訴え、豊かな感動を与える資料
イ　人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられる資料
ウ　生や死の問題、人間としてよりよく生きることの意味などを深く考えることができる資料
エ　体験活動や日常生活等を振り返り道徳的価値の意義や大切さを考えることができる資料
オ　多様で発展的な学習活動を可能にする資料

私は特に、イの「人間の弱さやもろさに向き合う」に注目した。生徒に対して、弱い自分に負けないで欲しいという思いもある。しかし、資料の中の主人公をはじめ、だれにも弱さやもろさはあるということに気付いたとき、生徒は、「これは人ごとではない」と自分のこととして考えを深められるのではないだろうか。そして、弱さやもろさを克服したところに人としての素晴らしい生き方があることに気づき、自分も弱さやもろさを乗り越えて生きていこうと考えることができるのではないだろうか。

実践では、鈴木恵美子がオリンピック選手をあきらめなくてはならないという状況の中から、マネージャーとしての自分の役割を果たし、チームの目標に向かって活動していくという実話の資料を選んだ。鈴木恵美子の生き方を通して、生徒は今までの自分の経験を振り返りながら、自分自身の生き方について考えることになる。挫折を経験したことのある生徒もいれば、これから経験する生徒もいるだろう。身の周りの友達が経験している場合もある。目の前の部活動だけでなく、これからの生き方について考えを深めやすい資料であると考えた。

(2)　道徳の時間の進め方の工夫

ア　教員の心構え

心で思っていても、なかなか言葉に表せない生徒も多い。その思いをうまく引き出すことが大切である。いわゆるコーディネーターのような役割を、教員は果たさなくてはならない。その際、道徳的価値を一方的に押し付けることがあってはならない。教員が生徒と共に考え、悩み、感動を共有していこうとする姿勢をもつことが大切である。

イ　ねらいの分析

本時のねらいとする「道徳の内容」を、学年段階や学校段階で理解しておくことが大切である。小学校からのつながりや小学校との違いに注目することで、中学校ではどのようなことを大事にしなければならないのかが少しずつ見えてくる。

そこで、「４－（１）集団生活の向上、役割と責任」について分析した（表１）。小学校低学年、中学年では「集団の一員としての自覚」といった内容は扱われていない。高学年で「身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす」が、中学校で「自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める」という指導内容が登場する。小学校の「与えられた役割」から、中学校の「どんな役割が必要かを自分で考えること」へと発展していくのである。それぞれの段階での違いを整理することは、生徒と共にどのようなことを中心に考え合えばよいのかを考える大きなヒントになる。

表１　ねらいの分析

小学校高学年　４－（１）	中学校　４－（１）
身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力し	自己が属する様々な集団の目標や立場についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努

	て主体的に責任を果たす。	める。
道徳的心情	自分も集団の一人であるという存在感を感じている。	集団として達成した喜びを、一人一人の喜びとして感じている。
道徳的判断力	自分の役割と責任を果たすことで、集団に役立つ人間であると考えている。	一人一人がそれぞれの集団の目標や立場を理解し、自分で役割を考え、その役割と責任を果たすことで、集団の目標を達成することができると考えている。
道徳的実践意欲・態度	集団の中で、自分に与えられた役割をもっと果たそうと思っている。	集団生活の向上ために一人一人の役割を果たし、その際に自分らしさを発揮できるようにしたいと思っている。どんな役割が必要かを自分で考えることができる。

ウ　授業の導入の工夫

授業の中で何を考えていくのか、どんな課題を解決していくのかといった課題意識を、導入の段階でもたせることにした。課題意識をもたせることで授業に主体的に参加できると考えたからである。

実践の中で、次の２種類の問いかけを試してみた。「みんなで一つのことをやり遂げる喜びを感じたことはありますか？」と「集団のために働くってしんどいこと？　仕方ないこと？」である。

前者の場合は、今までの経験から集団で取り組んだ充実感などをそれぞれ思い出しながら資料に入っていった。一方、後者の場合は、最初から「仕方ない」「大変や」などと自分の経験を振り返った意見が出てきた。「楽しい」「やりがいがある」という意見をもっている生徒もいたが、周囲が気になり、なかなか言えなかったようである。ところが、授業が進むにつれて、「集団としての喜び」「個人としての喜び」を感じていると思われる意見がどんどん出てきた。しんどさやつらさといった、人間としての弱さやもろさにかかわる課題意識をもたせる導入がよかったように思われる。自分たちの話合いで課題解決ができたという達成感を感じられた生徒も多かったのではないかと思われる。

エ　発問の工夫

生徒がどのように感じ考えるのかを想像しながら、発問を考えた。そして、生徒がもっと考えたくなるような、他の人の意見を知りたくなるような、自分ももっとよりよく生きたいと思えるような発問を考えるよう努めた。また、生徒の意見に対して、更に「なぜ」「どうして」と問いかけるようにした。

特に、中心発問については、次の三つのパターンの発問を考えた。

①　「４年間、だれにも、ただのひとことも、苦しさをもらさなかったのはなぜだろう。」

②　「『チームが勝つこと、そのことが喜びである』とあるが、なぜだろう。」

③　「チームが勝つこと、そのことが喜びであり、４年間が楽しかったと感じることができたのはなぜか。」

①の場合、「鈴木恵美子が素晴らしい人物だからできたのだ。」「彼女の自己犠牲の上に成り立つのだ。」という生徒の意見が予想された。これでは、自分のことを振り返りながら考えることは難しい。

②の場合は、次のような意見が予想された。

・一度決めたことだから
・選手に金メダルをとってもらいたいから
・楽しかったから
・自分の役割を果たしたいと思ったから
・選手と一心同体だったから

そして③の場合、更に多様な意見が予想され、実際、授業の中でも次のような意見が出てきた。

《個人としての喜び》
・やりがいを感じたから
・みんなが感謝してくれたから
・自分を必要としてくれるから

《集団としての喜び》
・チームが金メダルをとった
・みんなと一緒にがんばった
・チームのために働いた

・みんなが頼りにしてくれるから
・みんなと過ごせたから
・自分はなくてはならない存在だったから
・チームが勝つ姿をずっと見ることができたから
・チームがだんだん強くなった
・一緒に優勝した

つまり、「集団としての達成感」と「個人としての達成感」の両方を考えられるような発問が、ここでは必要であったのである。更に考えを深めるための補助発問についても、「金メダルをもらっていないのに喜んでいるのはなぜだろう？」「鈴木さんの喜びってどんな喜びだろう？」を用意した。これまで、発問に対して生徒の意見がなかなか出てこないと、つい焦ってしまい、同じような発問を、表現をかえて繰り返してしまうことが多かった。すると、焦点がずれてきて、生徒も答えに迷ってしまっていた。中心発問がずれないようにしなくてはならない。あらかじめ用意しておいた補助発問を投げかけるにしても、教員が生徒の意見をじっくり待つ姿勢がとても大切であると思う。ただ、出てきた生徒の意見をきちんと整理することも大切である。これが私には、とても難しかった。

オ　板書計画の工夫

そこで、板書の工夫を考えることにした。生徒の意見を単に並べるのではなく、整理して板書することによって生徒は自分の考えと他の生徒の考えを比較することができる。似たような表現であってもその根拠になっている考えは違うことにも気付くことができる。生徒の意見を整理しながらまとめ、その話合いの過程が分かるような板書を工夫することが大切である。

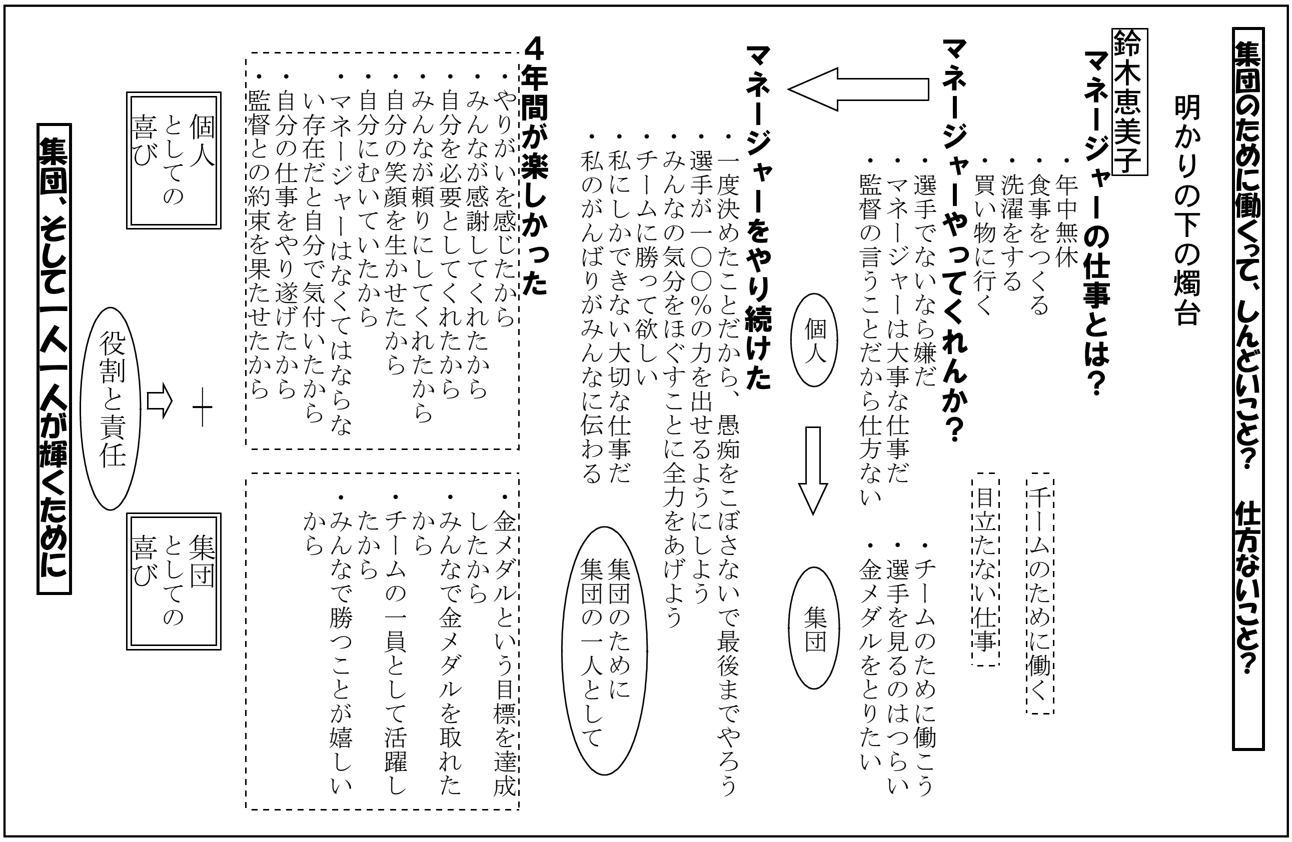

図１　「集団生活の向上」の板書

実践の中では、「個人として」と「集団として」の考え方の違いが分かるように黒板の上下に分けて生徒の意見を板書した（図１）。

カ　発言を促す工夫

学級には、自分の考えを上手に表現できない生徒がいる。それにはいろいろな理由が考えられるが、それでも生徒一人一人は自分の生き方について考えをもっている。そこで、色カードを使って自分の考

えを表現させる方法を取り入れた。自分の考えを「賛成(青)・反対(赤)・どちらでもない(黄)」の３色のカードで表現させる方法である。すると、表現の苦手な生徒も、堂々と顔をあげて授業に参加することができ、また、一瞬で学級の生徒の考えの傾向をつかむことができた。

キ　ワークシートの工夫

授業の中で生徒がじっくりと自分自身に向き合い、考えを整理する時間はとても重要である。授業の中で、特にじっくりと考えさせたいときには、ワークシートを活用した。

今回の実践の中では、「マネージャーになるように監督に頼まれたとき、鈴木恵美子さんは泣きながら何を考えたのだろう？」といったように、だれもがすぐに答えられそうな発問では自由に発言させ、「チームが勝つこと、そのことが喜びであり、やることが楽しかった、と感じることができたのはなぜだろう？」「鈴木恵美子さんの生き方から、私たちはどんなことを学ぶことができるか？」と、じっくり考えさせたい発問では、まず、ワークシートに書かせてから話合いへとつなげた。また、ワークシートの内容を授業後にまとめ、学級通信などに載せて紹介するといったことも行っている。

ク　話合いの形態の工夫

いつも同じ形態ではなく、そのときの授業の進め方によって様々な形態をとることにしている。最近はコの字型が多い（図２）。全員の表情が教員だけでなく生徒にもよく見えるからである。他の生徒の意見を聞き、新たな考えを知ることができる。また、想像以上に多くの考え方があることを知り、自分を見つめ直すこともできる。そして、もっと多くの意見を聞きたくなる。互いの表情を見ながらの意見交換はとても大切である。

図２　コの字型の授業形態

５　今後の課題

生徒が道徳的価値の自覚を深めるためには、話合いの充実がとても大切であることが分かった。これまでは、生徒の発言を聞いたり感想文を読んだりして、「なぜこんなに分かっているのに、行動に移せないのだろう？」と思うことが多かった。しかし、「道徳的価値を理解している」「自分とのかかわりで道徳的価値をとらえている」「道徳的価値を自分なりに発展させていこうとしている」の三つの視点で分析することによって、生徒の自覚の深まりの様子が見えてきた。また、話合いの中での様々な意見を教員が整理し、生徒が自分の考えとの違いに気付けるようにすることの大切さも分かった。そのためには、教員自身がねらいについてしっかりと考え、生徒の意見を予想することが重要であることも分かった。

授業の中で生徒の多様な見方、考え方、感じ方に触れ、私自身が生徒観や授業観の転換を迫られることも多くなった。「へえ、そんなことまで考えていたのね」「そんな思いがあったのね」と学ぶことが多く、生徒一人一人をじっくり見つめられるように変わってきたような気がする。

また、授業後に生徒同士で道徳の時間のことを話す姿も見られるようになった。今までは「あ～、終わった」「おもしろかった」であった会話が、「ぼくもあの子と同じこと考えてた」「でも、私は違うなあ」「ちゃんと言っておけばよかった」「これからは、あきらめない」などの会話に変わった。これらは、友達の意見を聞いて自分を見つめられるようになっている表れであり、話合い活動のもつ力であると思う。そして私も、「一人一人がクラブを一生懸命やれば、きっと学校全体がよくなると思うよ」「今日は先生も○○さんの意見には考えさせられたなあ」などと話に加わることもある。また、学年当初は「集団のために働くなんて嫌や」と言っていた生徒が、「集団のために働くのも悪くないなと思った」という意見をもつようになっていた。道徳の時間の中で、自分の価値観を広げ、深めたのである。これも話合いの力といえる。

道徳の時間がドタバタと流れることも少なくなり、生徒の発言をじっと待つことが私にとって苦しみではなく、むしろ楽しみになってきた。これからも、生徒と共によりよい人生を求めながら取り組みたい。